

冒険家の三浦雄一郎さん（80）が2013年5月23日、世界最高峰・エベレスト（標高8848メートル）登頂に成功した。80歳での登頂は史上最高齢記録。三浦さんは帰途ベースキャンプまでヘリで降りたことが報じられ、登頂の価値ウンヌンの声が聞かれたが、しかしエベレストは只の山ではない。かつて大英帝国が挑み、初登頂までに30年を要した山である。その小史を書いてみた。



「閣下、いま世界で一番高い山を発見しました」

1853年のある日、イギリスのインド測量局長官の部屋へ、インド人の測量局主任が飛び込んで息せき切って叫んだ。今まで地図上でピークXVという記号で呼ばれていた山頂が、8840メートルあることが分かったのである。チベット語で「チョモ・ルンマ」という名を持つこの世界最高峰は、イギリス人によって、前任の測量局長官の名をとり「エベレスト」と名付けられた。

エベレストの発見された19世紀中葉は、ヨーロッパに登山の趣味が起こりかけた頃で、アルプスやコーカサスで活動した彼らがヒマラヤの高峰を目指したのは第一次世界大戦後のこと、欧米列強は、国家の威信をかけてこの地域の高峰の初登頂を目指したが、14座の8千メートルを越える高峰は、第二次世界大戦前まで、ついに1座も征服されることはなかった。英国隊が目指したエベレストもその絶頂を人間に許すのは、第二次世界大戦後のことだったのである。

英国の最初の遠征隊がインドのダージリンを出発したのは、1921年の5月18日のこと、この年の登山隊は、エベレスト登山のルートを探ることが目的で、隊員の中のマロリーは、当時のイギリスで最も優秀な登山家に数えられ、彼が「あなたはどのようにして山に登るのか」と聞かれたのに、「そこに山があるからだ」と答えたという逸話は、余りにも有名である。

エベレストはダージリンの西北、約160キロほどの距離だが、そこへ行くための道はその3倍の距離がある。シッキムからチベットに入り高度4千メートルのチベット高原を西進して、ようやく山麓のチングリという部落に本部を置いたのは1ヶ月後のこと、ここで彼らはエベレストの周囲を廻って登頂ルートを調査した。

エベレストは北のチベット側と南のネパール側の国境線に聳えている。彼らはまずネパール側を偵察したが、そこにはすさまじい険悪さで立ちはだかるアイス・フォールが待っていた。次にチベット側からの東側と西側の二つのルートを偵察したが、西側は北斜面のロンブク氷河を登った後、岩と氷の長い稜線が待っていることが分かった。マロリーとその一行は唯一の望みの東側の稜線を選択し

た。その稜線を目指して鞍部のノース・コルに達したのは9月24日、そこでは怖ろしい風に見舞われたが、そこからは頂上までのルートを確認することが出来た。彼らは疲れていたが、十分な成果に満足して元の道を引き返した。

翌1923年、いよいよ登頂を目的とする登山隊がイギリスを出発、5月1日に登山隊はロンブク氷河の末端にベース・キャンプを設けた。登山隊は順調にキャンプを進め、前年確認したノース・コルの鞍部に第4キャンプ(7千メートル)を設営、ここから先は前人未踏の地であったが、彼らは天候にさえ恵まれれば頂上に立てることを疑わなかった。5月20日、マロリーを隊長とする4人の登攀隊員が9人のシェルパとともに第4キャンプを出発し、その日は7千6百メートルの地点に第5キャンプを設営し4人の登攀隊員のみが残った。翌日は快晴で頂上が見えていた。今日一日で頂上に立てる。彼らは希望を抱いて出発した。

しかし事実はそう簡単ではなかった。登り始めて間もなく一人が落伍した。残る三人も登るに従って苦しくなった。頂上はおろか、北東稜の肩を越えることさえ難しくなった。ついに彼らは高度計8225メートルの地点で引き返さざるを得なくなった。さらに何人かの隊員が頂上を目指したがことごとく失敗、最初のエベレストへの挑戦は、惨めな結果に終わったのである。

1924年のイギリスの第3次エベレスト登山は、マロリーの遭難という悲劇で有名である。この年は前年と違って天候に恵まれなかった。猛烈な吹雪と寒気でポーターの中に凍傷や肺炎にかかるものが続出したり、吹雪でノース・コルのキャンプにシャルパが取り残されるというアクシデントが発生した。激しい風に隊員もシェルパも疲労が激しく作業は進まなかった。しかしそのような困難を乗り越えて高度8170メートルの地点に第6キャンプを建設、2人の隊員が頂上アタックを目指してそのキャンプに入ったのは6月2日、翌日はその年初初めての穏やかな日になった。その二人、ノートンとソマーヴィルは勝利を信じてイエロー・バンドに沿って頂上を目指したが、次第に酸素稀薄の影響が現れてきた。それは身体のみならず精神までも朦朧とさせてしまうのである。それでも二人は登り続けた。正午ごろ咽喉を痛めていたソマーヴィルはついに力尽き、ノートン一人で行くことになった。彼は慎重に歩を進め、8572メートルの地点まで進んだが、戻りの時間を考えるとここで控え返さざるを得なくなった。これが30年後にスイス隊がエベレストに挑戦するまでの、人類が達した最高高度になった。

3日後、マロリーが再攀を期し、まだ若い学生のアーヴィンとノース・コルを出発、6月8日第6キャンプから頂上に向かった。しかしそれ以後のことは分からない。彼らは帰ってこなかったからである。同じ日、支援のために第6キャンプに向かった隊員のオデルがわずかに彼らの足跡を目撃していた。

「7900メートルあたりで、私は小さな岩のコブを登った。その日は早朝は晴れていたのに、いつの間にかガスが幕を張って上のほうは何も見えなかった。ところが岩の上で突然頭上の霧が晴れて、私はエベレストの頂上の全容を望んだ。その時私

は、遙か向こうの雪の斜面に、小さな物体が動いているのを見つけた。その物体は、頂上のピラミッドの下の岩のステップに近づきつつあった」

それはマロリー達に違いなかった。オデルは支援の食料を運び込むと、第5キャンプに戻り二人を待った。しかし二人は帰ってこなかった。次の日オデルは第6キャンプに行ったが二人が戻った形跡はなかった。二人の遭難は確実になった。

この報知はいち早く本国に伝えられ、大きな衝撃を与えた。そして登山隊の帰国を待って、セント・ポール寺院で国王の臨席の元、国葬が執り行なわれ、大司教が高きを憧れる魂をたたえ、二人の登山家の最後に栄光を置いた。

それから英国は戦争前の1937年の第7次まで登山隊を派遣したが、その絶頂はおろか、この第3次登山隊が達した高度を越えることは出来なかったのである。

第二次世界大戦後のエベレスト物語は、1953年の英国隊の登頂成功でクライマックスを迎える。世界の最高地点で英国、ネパール、インド、そして国連の旗をくくりつけたピッケルを片手に差し上げているネパールのシェルパ、テンジン・ノルゲイの写真は、彼の名とともにヒマラヤの登山史を飾る映像として記憶されることになった。しかしこの英国隊の物語の前に、テンジンが関わった奇妙な単独登山者の話から進めなければならない。

それは戦後まもなくの1947年、アール・デンマンという英国の青年が、ダーズリンで二人のシェルパに出会い、エベレストに登りたいと協力を要請したことから始まる。このシェルパの一人がテンジンであった。テンジンはデンマンの貧弱な装備を見てためらったが、デンマンが登頂の名誉は二人で分かち合おうと言った言葉がテンジンの功名心を癒した。彼らは同行を承知した。

3月22日デンマンたちはダーズリンを出発した。彼らはチベットに入り小さな部落を選んで泊りを重ね、遂にエベレスト北麓のロンブクに着いた。

その翌日、もう彼らは山へ向かって行を起こしていた。一日の無駄もなく二人のシェルパだけで吹きすさぶ暴風雪の中、ノース・コルの下にキャンプを設けた。そこから何日間か彼らはノース・コル目指して雪の斜面と格闘した。しかし連日の猛烈な風は収まる気配を見せず、彼らはその雄図を諦め、引き返さざるを得なかった。頂上を目指すどころか、遙か下のコルまでも達しなかったのである。

デンマンは翌年もダーズリンにやってきてテンジンと会ったが、今度はテンジンは首を縦に振らなかった。中華人民共和国の出現は外国人のチベットへの入国を不可能にしていた。デンマンは装備をテンジンに預けると、空しく英国に引き返した。テンジンは、後年彼がエベレストへの最初の登頂者になった時、この純粋な若者のために、若者から贈られた古い毛の帽子を被って行った。

さて、戦後の政治情勢が及ぼした影響は、大国の登山隊も同じことだった。戦前の英国隊が目指したチベット側からのルートは入国が不可能になり、南麓のネパール側からのルートに頼らなければならなくなった。1951年、英国隊は戦後最

初の遠征隊を送り、この南麓からのルートを発見した。それはエベレスト南麓の村として有名になるナムチェ・バザールから、戦前のマロリーたちが登攀不可能としたアイスフォールを登り、サウス・コルの鞍部から長い稜線を頂上を目指すものである。そして登山隊はこのサウス・コルまで登り切り、そこから見上げる稜線の果てに目的のピークを見上げ、次年度の成功を確約して山を降りた。

ところが、次年度の1952年はスイスがネパール政府から登山の許可を得ていたのでイギリスはその翌年まで待たされることになった。エベレストは初めてイギリス以外の国の挑戦を受けたのである。アルプスで鍛えた頑強な登山家たちは、「ジュネーブ人の岩場」と名付けられた岩稜に沿って急峻なアイスフォールを乗り切りサウス・コルに達した。次の日、4人のチームが頂上を目指し戦前の英国隊が達した高度を越えたが、絶頂に立つことは出来なかった。彼らが始めて経験する高度は、彼らの夢を打ち砕いたのである。

そしてとうとう、エベレスト登頂の栄光がイギリス隊にやってきた。この年は非でも頂上に立たずにはおかないという決意が、その高精度な装備にも表れていた。中でもイギリス隊が重要視したのは酸素器で、戦争によって戦前の重くて故障が多いものとは違い、軽くて信頼性の高いものになっていた。そして選ばれたシェルパの中にはテンジン・ノルゲイが居たことは言うまでもない。

この年は天候にも恵まれた。前年のスイス隊の残したルートを辿り順調にキャンプをサウス・コル上の第8キャンプまで進め、5月26日、二人の英国人の隊員が酸素器を携えてキャンプを出発した。前年のスイス隊が達した最高地点を越え、6時間でエベレスト南峰頂上に達した。しかし時間がかかりすぎたので慎重を期して彼らはそこから引き替えすことにした。

第二隊はヒラリーとテンジンであった。5月28日にサウス・コルを出発した彼らは慎重を期して頂上までの中間点に第9キャンプを設け、そこで一夜を過ごした。翌29日はすばらしい天気になった。キャンプを6時半に出発した二人は好調に上へ上へと登って行き、9時ごろに南峰に着いた。そこからいったん下って、主峰に続く稜線に取り掛かった。特性の防寒服が二人を寒さから守り、風が煙を巻き上げて身体には何の苦痛もなかった。それは彼らの今までの登山歴の中で最も安楽で至福に満ちた道であった。そして午前11時半、彼らはエベレストの頂上に立った。

---

第二次大戦後ヒマラヤの高峰は次々に征服されたが、その要因に戦争で開発された酸素器が貢献したことは間違いない。古いヒマラヤの登山史を読んでいると、どの山でも高度8千メートルを越えたところから登攀者は悲劇に襲われる。もちろん山が険しいということもあるが、彼らは当時の最高の技術と体力を持った男たちである。おそらくはこの高度が人間が存在できる境界なのであろう。エベレストはまさに、神と人の境界に聳える山なのである。

(これは深田久弥さんの「ヒマラヤの高峰」、「ヒマラヤ登攀史」から書いています)